第一部　総論

韓国における生死学研究の現況と課題

裵寛紋

一　はじめに

韓国における生死学研究は、おおよそ一九九〇年代後半より、欧米のタナトロジーと日本の死生学を取り入れて少しずつ研究が進められている。そのなかで、翰林大学生死学研究所は、現在、独立した研究所として「生死学」という名を掲げ活動している唯一のところである。これについては後述したい。

もちろん、今まで生死学研究の試みがなかったわけではない。たとえば、東義大学人文社会研究所では、韓国研究財団の二〇〇九年度支援事業として「ホモ・フマニタス死生学」を提案したことがある。[1] そこで提案したことは、死学、生命学、死生観の三つの研究領域を有機的に連結する教育プログラムの構築であったが、当初期待したほどの成果を出せなかったようである。また、東亜大学石堂学術院は、もともと韓国学の古典研究所として出発し、二〇〇二年に韓国学術振興財団の課題「韓国人の身体観・霊魂観・死観と医療倫理」、

二〇〇三年に「韓国の精神文化から生命倫理を読む」に取り組んだことがある。[2] 現在も学際研究を目指しているようだが、中心はあくまで医科学と生命倫理にあるため、人文学研究からはかなり遠いような印象を受ける。

韓国では生死学という学問自体が確立されている状況とは言い難い。あえていえば、ようやく新しい学問として位置づけられるように努力している段階であるといえる。ただし、学術的なレベルでの生死学研究は浅いとはいえ、死について思考し、また議論してきた研究内容の蓄積をまったく無視するわけにはいかない。

本報告では、まず韓国における生死学研究（厳密にいえば、死の研究）の現状について、大きく三つに分けて概観する。つづけて翰林大学生死学研究所の活動を紹介する。そして最後に、研究の現況に対する批判を含めて、韓国的生死学を確立するための課題と展望を示すことにしたい。

二　死の研究、タナトロジー、生死学

第一に、宗教学や哲学をはじめ、歴史学、文学、民俗学、文化人類学などの人文学の分野において行われている死の研究があげられる。従来の研究はもちろんのこと、近年のタナトロジー受容後は、死に対して歴史的・社会的・文化的なアプローチを試みる様々な研究が幅広く行われている。第二に、葬儀文化にかかわって行われている死の研究である。実は、韓国社会で死の問題が一般に議論されるようになった最大の要因は、一九九〇年代半ば以降に始まった「葬墓文化改革汎国民運動」にある。[3] 実際、この時期に死に関する書籍が多数出版されたし、この運動をきっかけに死の言説や死の研究が広がった。第三に、タナトロジーに触発された実践的な死の研究である。韓国では一九九七年のＩＭＦ（国際通貨基金）管理体制以降、自殺が急増して社会問題化し、二〇〇〇年ごろから自殺予防や生命教育、事故死・突然死を経験した遺族のケアなどに注目するよ

うになった。最近では、延命医療決定が社会的課題として登場し、安楽死・尊厳死に対する議論が起こるとともに、ウェルダイイング（well-dying）や死の準備教育の必要性も提起されている。いうまでもないが、このような三つの区分はあくまでも便宜的なものであり、お互いに連動するものであることを断っておく。

1　人文学における死の研究

死に関する研究といえば、まず死について問い続けてきた宗教的な問いを思い浮かべるだろう。各宗教の死の理解や霊性、死後世界（来世）、魂の問題などを取り扱ったものは数多くある。宗教学の分野では、こうした宗教からの死の理解に基づいて韓国人の死を考えようとしてきた。近年では、韓国社会の死に対する認識や態度が変化するにつれ、従来の死の研究から思考の幅を広げ、死の社会文化的な意味についてより深く問い直す作業が行われている。とくに宗教学者のチョン・ジンホン（鄭鎭弘）は、『出会い、死との出会い』（二〇〇三）など、宗教という認識の枠組みを通じて韓国社会に関する総体的な文化批評に力を注いできたが、現在韓国における死の文化に関しても精力的に鋭い発言をしている。

哲学の分野でも、東洋と西洋の思想家たちの様々な死の認識については早くから注目されてきた。過去の国文学・国史学からの分野から構成される韓国学の方でも、二〇〇〇年代以降、死の文化への関心が高まった。国語学者また民俗学者として神話研究に没頭してきたキム・ヨルギュ（金烈圭）の『メメント・モリ、死を記憶せよ――韓国人の死論』（二〇〇一）を代表的な例としてあげることができる。また、彼は共著『韓国人の死と生』（二〇〇一）で、哲学・文学・歴史学・民俗学などの学際研究を通じて、韓国人にとって死とは何なのかを明らかにしようとした。一方、現代社会における死の非人間化や隠蔽性の問題などについては、社会学的なアプローチも行われている。[4] 最近、英文学科出身のイム・チョルギュは、二〇〇九年五月のノ・ムヒョン

ン（盧武鉉）元大統領の自殺をきっかけに、『死』（二〇一二）を出版した。より根源的な動機として、子供の頃、パルチザン活動をした人々が無惨に殺されるのを目撃した経験があったという。そこで彼は、自殺の歴史、剣闘士、記憶と忘却の歴史（アウシュヴィッツ）などの問題を幅広く取り上げながら、韓国社会における死の問題を比較考察した。

韓国人の死生観について語ることは、決して容易ではない。西洋では韓国人共通の価値観や哲学を容易に見出せると思われがちであるが、韓国の思想は実に複雑極まりない。すなわち、儒教・仏教・道教をはじめ、シャーマニズムや風水説、その上にキリスト教が共存する「宗教デパート」または「思想デパート」といっても過言ではない。[5] したがって、死の見方も時代や地域によりかなり異なっている。韓国人の死生観を総合的に説明するには、上記のすべての側面を一々検討してから、それらをなお統合しなければならない。

近年の宗教学の注目すべき動向として、韓国宗教文化研究所で二〇〇九年に開催されたシンポジウム「近年の韓国社会における死の儀礼」と、二〇〇八年の沖間文化研究所の国際シンポジウム「葬式儀礼と他界観の韓日比較」の発表をまとめた『死の儀礼・死・韓国社会』（二〇一三）が刊行された。とりわけ死の儀礼（儀式）の変化を通じて、韓国社会の死の問題を診断しようと試みたものである。なお本書の付録には日本における葬儀の変遷を述べる三篇の論文も載っている。また二〇一四年一〇月、韓国宗教学会と韓国宗教社会学会が共催したシンポジウム「グローバル時代の災害と死、そして宗教の役割」では、セウォル号沈没事故をはじめ、日本や東南アジアの津波のような災害を意識しながら、宗教界の対応策を探ろうとした。

2　葬儀文化にかかわる研究

死を処理する葬式や墓地について、その社会文化的な意味を問うことは、従来からもあった。具体的には、

葬儀の手順を構造的に分析した研究や葬儀文化の変遷について論じた研究などである。韓国の葬儀について考古学的にアプローチしたり、歴史的な変化を追究したり、あるいは民俗学的な方法で昔と今の葬儀を比較したりしてきた。[6] しかし、一九九〇年代半ば以降、とりわけ葬儀文化にかかわる研究が爆発的に増えたのは、前述したように、政府の葬儀政策の策定と関連して、葬儀文化改善のための調査や提案などが集中的に行われた事実と無関係ではない。

「葬墓文化改革汎国民運動」は、「墓地国土を錦繡江山（美しい山河）に！」という目標を掲げて始まった。一九九九年、ソウル市議会は「葬墓文化改革特別委員会」を構成し、本格的な活動を開始した。これはソウル市の第二火葬場建設計画に関連するものであった。そこに市民団体とメディアが先頭に立ち、一九九九年「葬墓文化改革汎国民協議会」と『ハンギョレ新聞』は共同で葬儀文化改善のためのキャンペーンに乗り出した。土葬と火葬をめぐる論争の目指すところは、あまりにも自明である。すなわち、土葬が解決されるべき課題として想定されており、それを解決するには火葬しかないということである。その言説が形成し広がっていく過程は、論争というよりも、一方的に火葬に反対する考え方を啓蒙しようとするものであった。学界やマスコミの報道は、ひたすら土葬の問題点を指摘しながら火葬の正当性を主張した。いってみれば、土葬は悪、火葬は善であるかのように誘導していったのである。最も大きな理由としてあげられたのは、土葬が環境保全と国土の効率的な利用を妨げるという点であった。しかし、問題の本質は、葬儀の方法の違いにあるのではなく、韓国社会で死をいかに考えているのかといった認識の問題にあるだろう。結局、葬儀文化を行政や市民運動の次元にのみ還元させてしまい、かえって肝心の問題については語られないことが懸念される。[7]

市民団体のみならず、いくつかの葬儀会社も、死の文化全般にかかわって色々と積極的な活動を行っている。ただ、それらの活動は学術的な関心からではなく、やはり葬儀文化の改善キャンペーンに賛同するものにとど

まっている。二〇一四年八月、国会では、（社）韓国葬儀業協会と（社）全国公園墓園協会の主催により、「韓国葬儀文化の発展のための国会セミナー」が開催された。葬儀文化の現実と改善策が公衆保健学などの観点から議論されると同時に、葬儀文化の発展にかかわるウェルダイイングの教育が強調された。

いずれにせよ、このような社会的雰囲気と軌を一にするように、一九九九年、ソウル保健大学（現、乙支大学）には葬儀指導科が開設された。アメリカの霊安学科（The mortuary science）をモデルにしたものであった。続いて二〇〇〇年、東国大学仏教大学院には葬儀文化科が開設された（二〇一四年九月、生死文化産業研究所設立）。二〇〇二年には大田保健大学に葬儀指導科、二〇〇三年には昌原文星大学に葬儀福祉科、二〇〇四年にはソラボル大学に葬儀サービス経営科（葬儀風水創業学科）、二〇一二年には東釜山大学に葬儀行政福祉科など、専門大学（college）を中心に葬儀関連学科が多数新設された。これらの学科の主な科目は、葬儀学概論（葬儀関連文化、マナー、法規など）、葬儀心理学、葬儀制度論、葬儀場経営論、回復技術学（エンバーミング、エンゼルメイクなど）などから構成されている。実用性を優先したカリキュラムに偏って、死そのものに対しては表面的なアプローチにとどまっていると言わざるを得ない。せっかくの関連専門学科の開設にもかかわらず、この葬儀文化学と呼ばれている新しい応用学問は、学術の可能性を自ら制限し、また探求領域を狭小化したのである。言い換えれば、葬儀文化学と称される応用学問と生死学との関係をいかに設定するかという議論から、学問の名称、目的、範囲と内容、学部と大学院との学問的な分業と役割に至るまで、学科及び学問の位相定立のための試みがなされる必要がある時期である。関連学科の開設は今後生死学の発展にとって転機になりうるにもかかわらず、学問の基盤や産業の需要が後押しされていない現段階では、学科の未来は必ずしも明るいわけではない。[8]

要するに、葬儀文化の改善運動や葬儀文化学科の新設などが総合的な生死学研究のレベルにまではつながら

なかったのである。ただし、このような韓国の葬儀文化の急激な変化、すなわち病院の葬式場の利用と葬儀会社の登場、火葬への転換、自然葬の推奨などの一連の社会的な動きが、死の問題を公論化し、死の教育の必要性などを語り始めるようにしたのは確かである。

3　タナトロジーから触発された研究

韓国にタナトロジーが紹介されたのは、それほど古いことではない。一九九一年に「生と死を考える会」が設立されたことをその嚆矢と見ることができる。キリスト教に基づいている「生と死を考える会」は、死の教育の大衆化を目指して啓蒙活動を開始した。その母体となる覺當福祉財団は、一九八七年の設立当時、韓国ボランティア能力開発研究会を発足し、韓国初のボランティアを生み出した機関でもある。財団の中には、一九九一年から始まった「生と死を考える会」をはじめ、「虹ホスピス」「非行青少年相談」「多文化研究会」などが活動している。

その後、二〇〇四年には、ソウル大学名誉教授のチョン・ジンホンと翰林大学哲学科教授のオ・ジンタク（呉進鐸）が中心となって「明るい死を準備するフォーラム」を設立した。このフォーラムは、「臓器提供運動本部」「葬墓改革汎国民協議会」「ホスピス協会」「生命分かち合い実践会」の市民団体の会員及び大学の哲学教授や高校の倫理教師などの三〇人の集まりから始まった。また、二〇〇五年に設立された「韓国死学会」は、梨花女子大学韓国学科の教授であるチェ・ジュンシク（崔俊植）を会長として、哲学・宗教学・心理学・社会学・医学などの専門家が集まった学術フォーラムである。[9] これらの活動を通じて、実践学問としての生死学及び死の教育が国内に徐々に普及するようになった。

その間に西洋の死学や日本の死生学関連の書籍が数多く翻訳された。また、死学にかかわって臨死体験など

も紹介された。現在は宗教・哲学だけでなく、医学・社会学・心理学・法学・教育学・看護学・社会福祉学などの様々な分野で死を扱っている。こうして死学を紹介しながら、ウェルダイイングについて論じる研究は徐々に増えている。そのなかで、チョ・ゲファ他『死学序説』（二〇〇六）は、看護学・教育学・社会福祉学の大学生向けに著した、すなわち保健医療・相談・社会福祉などの専門家養成のための教材である。これは二〇〇四年度から二年間、韓国学術振興財団の研究プロジェクト「死学に関する教科・教材の開発」の成果である。

韓国の場合、生死学の主な実践分野の一つであるホスピス活動は、生死学が導入される以前から、カトリック・仏教・キリスト教・円仏教などの宗教団体によって活発に展開されてきた点が特徴的である。それに比べると、死に関する学術や死の準備教育は未だに社会的に十分に理解されているとは言い難い。

韓国初のホスピスは、一九七八年、江陵にあるカルバリー病院（Calvary Hospice: オーストラリアから来たシスターたちによる Little Company of Mary が運営）で終末期看護を行ったことと知られている。一九八二年にはソウルの江南聖母病院を中心に本格化され、ほとんどのカトリック系病院においてホスピスが実施されている。一九九一年には韓国ホスピス協会が設立された。二〇一一年の段階で、全国四三ヶ所のホスピス指定医療機関で七二二床の病床を運用しているという。因みに二〇一四年一二月四日には、実際のホスピス病棟の様子を描いたドキュメンタリー映画「いのち」（イ・チャンジェ監督）が公開され、話題を呼んでいる。

最近、韓国でウェルダイイング、ウェルエンディングが流行るようになった背景の一つには、安楽死・尊厳死論争もある。二〇〇九年二月、普段より尊厳死を肯定的に認めてきた故キム・スファン（金壽煥）枢機卿は、無意味な延命医療を拒否することで自ら尊厳死を実践して見せた。ちょうど同じごろ、ソウル高等裁判所は、セブランス病院の患者キム某氏の家族が起こした訴訟について、病院側は患者家族の意思通り人工呼吸器

を外すように判決を下した。この延命医療中断認定判決は、安楽死・尊厳死に対する社会的議論を呼び起こした。二〇〇九年、国立がんセンター（二〇〇一年開院）では、緩和ケアに関するシンポジウム「尊厳ある死のための社会的合意」を開催した。また同年、セブランス病院と韓国死学会は「人間の生命と尊厳死」というシンポジウムを開いて、医学と宗教の学際研究から尊厳死問題を考えようとした。

もう一つの要因として、二〇一一年に有名芸能人の自殺が相次ぎ、さらに一般人の模倣自殺も続くことになり、自殺が大きな社会的問題として浮かんできた点があげられる。大韓医師協会は、同年「自殺は病気であるか」を主題にシンポジウムを開くなど、自殺は病気であるとの認識を広め、予防対策を提示し、自殺率の減少のために対国民キャンペーンを展開することを表明した。もちろん政府の第一次自殺予防総合対策が樹立した二〇〇四年を前後して、政府・宗教教団・民間団体の連合からなる自殺予防活動は続いており、二〇〇九年からの第二次自殺予防総合対策では心理学的剖検の方法の導入計画をも発表された。

このような社会的雰囲気を反映するかのように、最近韓国では、高齢者だけでなく、若者の間でも、死の教育、死の体験、ウェルダイイングなどへの関心が高まっている。韓国初の死の準備教育の専門人材養成プログラムを開始した覺當福祉財団では、二〇〇二年から「ウェルダイイング教育指導者コース」（一四週間）を運営している。他にも、一般人を対象に死の準備プログラムを実施している機関が増えてきた。そこではバケットリストやエンディングノート、自伝の執筆、遺言の作成、入棺体験、法的手続き及び葬儀方法の選択などの実質的な支援を提供している。

三　翰林大学生死学研究所の活動

二〇〇四年に翰林大学哲学科教授のオ・ジンタクが設立した生死学研究所は、哲学の観点から自殺予防や死の教育に関与してきた。もともと東洋哲学を専攻したオは、前に述べた「明るい死を考えるフォーラム」の創立メンバーでもある。オは哲学科内に死の準備教育科目及び自殺予防教育科目を開設、二〇一一年からは生死学自殺予防協働専攻課程を開設するなど、この一〇年間、韓国の生死学を開拓してきた。

生死学研究所は、二〇一二年九月から韓国研究財団支援の人文韓国プロジェクトに選定され、いま大きな転機を迎えている。二〇二二年まで一〇年間遂行される研究課題名は、「韓国的生死学の確立と自殺予防の地域ネットワークの構築」である。韓国における生死学研究が西洋のタナトロジーと日本の死生学から研究方法や研究対象を多く受け入れているとはいえ、それは韓国の文化や伝統あるいは韓国人の死生観に合った研究であるとは言い難い。西洋のタナトロジーは生と死とを断絶したものと見なし、主に神学的基盤の上に成り立って死の準備教育に重点を置いているのに対し、日本の死生学は日本人の死生観や現代の生命倫理の問題をも含めて実践学としての死学を確立しようとした。翰林大学生死学研究所では、韓国生死学の課題は何よりも韓国的生死学の確立だと判断し、まさにそれを第一の課題としたわけである。そのためには、今まで多くの研究成果を蓄積してきた海外機関との連帯や協力は欠かせない。

生死学研究所の活動領域は、次の三つに分けられる。

・思惟と省察――韓国社会の死の認識を理解するための人文科学中心の学際研究
・コミュニケーションとケア――不幸な死を防ぐための学際モデルの構築

・共有と拡散――社会的普及のための生命教育プログラムとコンテンツの開発

以下、それぞれの研究活動について簡単に紹介することにする。

1　思惟と省察

東洋と西洋の死の文化を包括的に理解しながら、現代韓国社会の死の文化を考察できる研究を目指す。研究成果は最終的に生死学研究所の企画叢書の形にまとめている。研究所の主催する国内外の学術大会、コロキウム、ワークショップなどは、この叢書計画と連携して実質的な共同研究が行われるようにしている。

〈国内学術大会〉
○第一回「韓国社会の死の文化、その現状を問う」　二〇一三年三月二九日
○第二回「生死学からみる死の理解の多様性」　二〇一三年一一月二日
○第三回「延命医療決定の法制化に対する学際的省察」　二〇一四年四月二三日
○第四回「春川市居住の高齢者の自殺行動と悲哀」　二〇一四年一二月一一日

〈国際学術大会〉
○第一回「死の定義、どうするか？」　二〇一三年六月五日
○第二回「自殺予防のための東アジアの協力と連帯」　二〇一四年五月一四日
○第三回「死と臨終のための東アジアの理解」　二〇一五年二月二五日

生死学研究所で企画している叢書は、次のとおりである。

①単著

題目	筆者	出版年
自殺予防、解法はある――死の理解が生を変える	オ・ジンタク（翰林大）	二〇一三
自殺予防の哲学――生命教育と自殺未遂者教育事例	オ・ジンタク（翰林大）	二〇一四
死、復活、そして永生――キリスト教の生死観を読む	キム・キョンジェ（韓信大）	二〇一四
仏教の生死観と死の教育	アン・ヤンギュ（東国大）	二〇一四
死を考えるということ――古代ギリシャにおける死の理解	イ・カンソ（全南大）	二〇一五
死の政治学――儒教の死の理解	イ・ヨンジュ（光州科学技術院）	二〇一五
尊厳なる死の文化史	ク・ミレ（東国大）	二〇一四
チベットの死の理解――天葬	シム・ヒョクジュ（翰林大）	二〇一五
死と苦痛、そして生命――神学的理解	パク・ヒョングク（翰林大）	二〇一五

②訳書

題目	訳者	原著
좋은 죽음	チョン・ヒョウン（東義大）	立岩真也『良い死』（筑摩書房、

일본인의 사생관을 읽다——메이지 무사도에서 영화 <굿바이>까지	베・カンムン（翰林大）	二〇〇八） 島薗進『日本人の死生観を読む——明治武士道から「おくりびと」へ』（朝日新聞出版、二〇一二）
성스러운 죽음의 기술	ヤン・ジョンヨン（翰林大）	Kenneth Kramer, *The Sacred Art of Dying: How the World Religions Understand Death* (Paulist Press, 1988)
구원과 자살——짐 존스・인민사원・존스타운	イ・チャンイク（翰林大）	David Chidester, *Salvation and Suicide: An Interpretation of Jim Jones, The Peoples Temple, and Jonestown* (Indiana University Press, 2003)

③共著

題目	筆者数	出版年
死、いかに理解すべきか	四人	二〇一四
生と死の人文学	一二人	二〇一四
死の儀礼と文化的記憶	一〇人	二〇一五
死の風景を描く——韓国的生死学のために	一六人	二〇一五

死をめぐって対話する——東アジアの生死学のために　一二人　二〇一五

一例として、共著『死の風景を描く——韓国的生死学のために』をあげてみる。本書は、死にかかわる社会的・文化的・歴史的な概念のなかで、具体的なテーマを選定し、それぞれのテーマに適した専門家に執筆を依頼した。とくに伝統的な死の理解（第一部）に関連するトピックは、喪輿（葬儀の際に屍を墓地まで運ぶ祭具）、コクデュ（Kokdu: 喪輿を飾る木の彫刻。木偶とも呼ばれる）、神主（位牌）、祭祀（法事）、族譜（家門の系図）など、韓国特有の死生観を示すものといえる。これらは朝鮮時代後期から近代初期まで持続したが、現代に入って急激に変化していった。その詳細を明らかにすることにより、韓国の死の文化を批判的に考察する手がかりが見つかることを期待している。

『死の風景を描く——韓国的生死学のために』

第一部 伝統的理解		第二部 現代的省察	
喪輿	イム・ヒョンス（韓国宗教文化研究所）	生命	チョン・ジンホン（蔚山大）
コクデュ	キム・オクラン（コクデュ博物館）	孤独死	イ・ミエ（啓明大）
神主	イ・ウク（韓国学中央研究院）	尊厳死	パク・ヒョングク（翰林大）
鬼神	カン・サンスン（高麗大）	葬儀社	シム・ショクジュ（翰林大）
霊媒	キム・ホンソン（京畿大）	火葬	チョン・イリョン（西江大）
祭祀	パク・ジョンチョン（高麗大）	災害	ベ・カンムン（翰林大）

族譜	チャ・ジャンソブ（江原大）
葬儀	関根英行（嘉泉大）

テロ	イ・チャンイク（翰林大）
臨死体験	ヤン・ジョンヨン（翰林大）

2　コミュニケーションとケア

自殺予防のための地域ネットワークの構築という課題遂行のために、社会調査チームでは、春川市に居住する高齢者を対象に、二〇一三年からリサーチを実施している。社会調査チームの研究結果は、『春川市居住の高齢者の自殺行動と悲哀』で刊行予定である。

研究目標及び課題		
一段階		現場における死の認識と対処方法
	一年次	韓国人の死の理解と死に対処する能力の感覚に関する研究
	二年次	自殺と尊厳ある死に関する調査及び内容分析
	三年次	死と末期患者に対する保護の態度に関する多角的なアプローチ
二段階		自殺の危険因子と社会現象に関する深層分析
三段階		自殺予防のための統合的な教育モデルの提示

また、看護学専門の共同研究員が中心となって開発した『家庭ホスピス（緩和医療）ケア提供マニュアル』

が刊行された。

3　共有と拡散

研究者や専門家の育成と社会的拡散を目的として、二〇一三年九月からは、生命教育融合大学院（修士・博士課程）を開設して運営している。他にも、生命教育と死の教育を普及していくために、地域社会を対象に、以下のような活動を行っている。

○教師職務研修「学校の現場における生死学プログラムの拡散」
○市民人文講座（軍部隊）「創造的な軍生活のための人文学講座――自殺予防のための人文学」
○読書コンペティション「生命愛と自殺予防コンペ」
○「生命愛のための希望コンサート」、「生命映画祭」、「ウェルダイイング演劇」など
○大学生を対象としたブログの開設、自殺予防アプリケーションの開発

四　韓国的生死学の今後

生死学を死から生への意味を省みようとする実践哲学というならば、おそらくその意味は、伝統文化を振り返りながら、現代社会の生活に深く関与している死について考えることであろう。つまり、文化現象として死を考えることは、社会的・歴史的・文化的観点から死について問い直すことに他ならない。それは、各々の専門分野を超えて、哲学、宗教学などの人文学から社会学、心理学、医学などへの学際的アプローチにより初め

て可能であろう。

また、生死学の主な実践領域としては、ホスピス、ターミナルケア、グリーフケア、死の準備教育、自殺予防（生命教育）などがあげられる。これらの実践的な活動は、政府及びマスコミや市民団体とも協力するとともに、家庭・学校・病院などの地域社会からのニーズに応じる必要もある。このような生死学の研究と活動が既成宗教や宗派に縛られる必要はないだろう。ただ、韓国の場合、ホスピス活動を既に各宗教団体が行っているだけに、宗教と宗派を超えて韓国的生死学を模索することは簡単ではないかもしれない。

韓国では未だに死について語ることがタブー視されており、死の教育などについても社会的認識は低い。ゆえに死について互いに異なる理解を自由に語り合える成熟した社会をつくることは、確かに重要である。とはいえ、生死学の目指すところがウェルダイイングという啓発キャンペーンのレベルで終わってしまってはならないだろう。自殺予防の目標が単に自殺率の減少にあるわけではないように、死はあくまでも個人的・心理的な問題を超えて、社会文化的な問題として理解される。まず必要なのは学術的基盤の構築であり、そこで翰林大学生死学研究所は、韓国的生死学の確立の一助となるよう努力していくつもりである。

■註

1　チョン・ヒョウン（鄭孝雲）「知的融合言説としての「死生学」研究」『死生学研究特集号　日韓国際研究会議「東アジアの死生学へⅢ」』、東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一一年。

2　イ・サンモク他『韓国人の死の観念と生命倫理』東亜大学石堂学術叢書11、セジョン出版社、二〇〇五年。イ・サンモク他『韓国人の生命観とヒト胚クローニングの倫理』東亜大学石堂学術叢書12、セジョン出版社、二〇〇五年。

3　ソウル特別市時事編纂委員会編『ソウルの人々の死、そして生』、セハン文化社、二〇一二年、二二二～二二四頁。

4 キム・サンウ『死の社会学』、釜山大学出版部、二〇〇五年。チョン・ソンヨン『死を生きる――私たちの時代の死の意味と言説』、ナナム、二〇一二年。

5 ファン・ピルホ「死に対する現代西洋哲学の四つのアプローチと韓国人のアプローチ」、韓国宗教学会編『死とは何か』、チャン、二〇〇九年（一九九〇年）、二七六～二九二頁。

6 国史編纂委員会編『喪葬礼、生と死の方程式』、ドゥサン東亜、二〇〇五年。パク・テホ『葬礼の歴史』、西海文集、二〇〇六年。ヤン・スンイ『韓国の葬礼――韓国人の生死観に関する人文学的省察』、ハンギル社、二〇一〇年。キム・シドク『韓国の葬礼文化』、民俗院、二〇一二年。

7 チョン・ソンヨン、前掲書、三一七～三三一頁。

8 建陽大学の礼式産業学科、明知大学の社会教育大学院家庭儀礼学科の場合は、現在、学位課程を廃止している。

9 韓国死学会編『韓国人のウェルダイイングガイドライン』、デファ出版社、二〇一〇年。韓国死学会ウェルダイイングガイドライン制定委員会編『死を迎えること――人間の死、そして死んでいくこと』、モシヌンサラムドゥル、二〇一三年。

（ベ・カンムン　翰林大学生死学研究所HK研究教授）